

主 題：神を愛する女性たち

聖書箇所：テトスへの手紙 2章3－5節

イスラエルの歴史を見ると、ほとんど固有の法的権利を持たずに未成年者と同等に扱われてきた女性たち、生活習慣においても男女は区別されていました。女性は自分が食事をする前に家族の男性に食事を与えることが必要でした。水を汲みに行くことも着物を繕うのも食事を作るのもすべて女性の務めでした。旅をするときは男が家畜にのって、女性はその後を歩いたのです。こんな時代、そのような中にあって、子どもたちが夫が母を妻を称賛しているところが聖書の中に記されています。よく私たちが「箴言31章の女性たち」と言って表現するところですが、ここにすばらしい女性が記されています。

「その子たちは立ち上がって、彼女を幸いな者と言い、夫も彼女をほめたたえて言う。「しっかりしたことをする女は多いけれど、あなたはそのすべてにまさっている。」と。(31：28, 29)

なぜこのように家族の者が彼女をほめたたえたのでしょうか？それはこの次のみことばに書かれています。30節**「麗しさはいつわり。美しさはむなし。しかし、主を恐れる女はほめたたえられる。」**と。主を恐れる女性だから、彼女は家族の者からほめたたえられたのです。つまり、彼女はあらゆる悪を避け神の前に正しく歩もうとしていたのです。神のみことばを聞きそれに従順に従って行こうとする、そういう人であった、言い方を変え、この神を恐れる女性は神を愛する女性だったのです。だから彼女は、与えられているその責任を精一杯主のために為そうとしたのです。

イスラエルの教えによれば、男は18才、女は13才で結婚してもよいと言われています。結婚して子どもが生まれた場合、その幼児期の子どもは母親の手元で育てられました。ローマにおいてはこのように教えられています。母親の娘に対する一番の責任は、良い母になるために必要な訓練を与えることでした。息子に対しては何かというと、それは良い夫になるために訓練を与えることでした。もちろん夫も妻も協力しながらこのような働きをしたのですが、母親には特に大きな責任があったのは、父親よりも子どもと長く時間を過ごしたからです。これはローマのことですが、イスラエルでは教育の中心は宗教と倫理でした。親が子どもたちに十戒をまず教え、民族の歴史が律法の一部として語られたのです。そして、それを通して、親は子どもたちに神の恵みとこの神を恐れることを教えていったのです。母親は幼い子どもたちに一番大切なことを伝えて行きました。ナポレオンも言いました。子どもの将来はその母の努力によって定まると。母親の影響が大きいことを彼も言うのです。

今日、私たちはパウロのみことばを見て行くのですが、女性の皆さんにとってその役割は非常に重要であるゆえに、神の前に正しく生き続けて行くことが大切です。神を愛する者として歩み続けて行くことが大切です。その理由をこのみことばを通して見て行きます。パウロは、もうすでに子育てを終えた女性に対してと、今子育てをしている女性に対して教えを与えています。

☆ 神を愛する女性への教え

A. 年配の女性に対して 3節

3節に**「同じように、年をとった婦人たちには、」**と記されています。パウロが言うのは、もう子育てが終了し子どもたちが家から巣立っていった、恐らくイスラエルの歴史や生活習慣などから見て、60代を越えた女性たちが対象ではないかと思われそうですが、その人たちへの教えが記されているのです。この3節には四つのことが記されているのですが、ぜひ覚えていただきたいことが二つあります。

◎ 子育てを終えた女性に対して

1. 子育てを終えても霊的に成長し続けて行きなさい
2. 後輩の模範となり続けて行きなさい

この二つがパウロが3節で教えることです。そして、それを具体的に四つのことをもってパウロは教えて行くのです。

1) 神に仕えている者らしく敬虔にふるまうこと

「神に仕えている者らしく敬虔にふるまい、」とあります。このことばは「聖なる者にふさわしい」とか「神聖なものにふさわしく」といった意味をもちます。つまり、パウロはクリスチャンの婦人に対して「あなたがたはイエス・キリストを信じ救いに与ったときに聖い者にされたのだから、聖い者としてふさわしい生き方を継続して行なって行きなさい」と言うのです。神聖な働きに携わっている者として生きて行くようにと。パウロは聖く生きて行きなさいというのです。そして、その聖さがうわべだけであってはならないということをパウロは伝えるために、「ふるまう」ということばを使っています。「ふるまう」というのは行ないだけでなく心の状態を現わすことばです。見かけだけでなく心から、神を恐

れているゆえに、自分の言動に注意しすべてのことを主に喜んでいただけるように、働きを為して行きなさいとパウロは教えるのです。

2) 悪口をいわない

「**悪口を言わず、**」とあります。このことばは、中傷するとか、口の悪いとか、誹謗者であるという意味をもちますが、もう一つ、「悪魔」という意味があります。なぜパウロがこのことばをここで使ったのかと言いますと、悪口を言う行為は実は悪魔の行為だからです。悪魔はいつもそれをするのです。「**…私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。**」（黙示録 12：10）とあるように、悪魔はいつも人々を訴えているのです。だから、私たちも人のことを「あの人はこんなことを言っている、あんなことをしている」と悪く言うなら、悪魔と同じだと言うのです。イエスはヨハネの福音書 8：44 で「**あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。**」と、これがサタンだと言います。私たちが気を付けなければいけないのは、私たちが人の悪口を言っているとき、真実でないことを言っている可能性もあります。口から悪いことばが出て来る、悲しいことですが、私たちは日々の生活で何度それを経験することでしょう。口から悪いことばが出たときは心も塞ぎます。喜びがなくなります。ですから、パウロはことばによって罪を犯してはならないと言うのです。自分のことばに対して注意を払わなければいけないのです。なぜなら、悪口は自分の罪を満足させることはできても、神を満足させることは決してできないからです。悪口は神の栄光を汚すものであって、神の栄光を現わすものではないのです。私たちはしっかりそれを覚えて、自分の口から悪いことばが出ることを止める決心をすることです。パウロがあえて年配の婦人にこの教えをしたのは、恐らく子育て中の婦人よりも時間ができるから、言うてはならないことを言うことがないようにと警告をするのです。

3) 大酒のとりこにならない

「**大酒のとりこにならず、**」、大酒のとりこになっている人はたくさんいるようです。ある市民病院の医師がアルコール依存症のメール相談をしたところ、3年間に120件しかなかったものが、99年以降、1日に30～100件のアクセスがあり、しかも、その半分以上が女性だと言います。また、別の医師は女性のアルコール依存症に関して、原因は多様で複合的で今現在のことだけではありません、仕事、対人関係、家族問題、うつ状態、中年の生き甲斐の損失、老年期の暇などが原因にもなるのだと言います。もちろん医師によっていろいろな説があるのですが、共通していることは、生き甲斐としていたものが取り除かれた時、いったいこれから何のために生きて行けばよいのか、そのように思っている人がいたとして、その人たちがすることはなんとか心の中の渇きを満たそうとするのです。そして、ある人はアルコールに走るのです。つまり、人間は自分の心をなんとか満たそうとし続けているのです。そして、悲しいことは神以外のことにその満足を見出そうとしているのです。ですから、いつまで経っても満足を得ないのです。私たちはイエスを信じる前そのようにして来たのです。心の満足をなんとか得たい、本当に満たされて喜んで感謝して生きて行きたいと。それは物で与えられるものでないことに気付いたのです。ところが、クリスチャンでありながら、心に渇きを覚えた時、神以外の方に走ってしまっ、問題の中に泥沼化してしまうような結果を自分の身に招くことがあるのです。自由な時間ができた、寂しさを日々覚えている、そのようなとき気を付けなければいけません。パウロは言います。お酒の力に頼っても何の解決もないと。そして、そのようにお酒に助けを求めてしまったなら、よき模範を示すことができないと言うのです。

4) 良いことを教える者であること

「**良いことを教える者であるように。**」と言います。良いこと、それは神のおことばです。つまり、年配の婦人たちがなぜ教会に必要なのか、彼女たちは長年の間、みことばに従って生きてきたのです。だから、パウロが言うのは、あなたがたがみことばを学びみことばに従って来たように、今度はそのみことばのすばらしさをあなたがたの後輩に伝えて行きなさいということです。いろいろなことで今子育て中の人たちは悩んでいます。その人たちにみことばをもって励まし、ある時は叱責し、そのことによって彼女たちが神の前に喜ばれる者に変えられて行くようにとパウロは望んでいるのです。

パウロは年配の婦人たちにこのようにしなさいと教えるのです。

4節を見ると「**そうすれば、**」とあります。つまり、このようなことを行なったその結果です。また、目的でもあります。このように歩み続けて行くなら、あなたはある目的を達成することができる、ある結果をもたらすことになるのだと言うのです。5節に「**さとすことができるのです。**」とあります。若い婦人たちに向かって「さとすことができる」と言うのです。この「さとす」ということばは「節制する」ということばから来ています。人に自制することを教える、訓練する、人が自制心を磨いて行く原因と

なるという意味です。つまり、信仰の先輩である年配の婦人がみことばに従って歩んで行くな、若い人々に対して、彼女たちもそのように歩もうとするすばらしい影響を与えることになるということです。だから、このような歩みをしなさいとパウロは勧めるのです。

子育てを終えた皆さん、あなたの責任はまだ終わっていないのです。あなた自身が神を愛する者として生きてきたように、これからもますます神を愛し神に従って行くことです。そのとき、あなたの後輩はあなたの生き様から大切なことを学んで行くのです。その責任があることをパウロは教えたのです。

B. 若い婦人たちに対して 4, 5 節

「**そうすれば、彼女たちは、若い婦人たちに向かって、**」と、子育て中の婦人、また子どものいない既婚の婦人に対して教えています。パウロが教えることは一つ、「模範にならって歩んで行きなさい」です。年配の婦人たちが実践していること、また、教えてくれていることをあなたたちも実践するようと言うのです。そして、具体的にその歩みを教えるのです。

1) 夫を愛する

4 節に「**夫を愛し**」とあります。既婚の婦人に対して、あなたが最も優先することはあなたの夫を愛することだと言うのです。仕事でもない、親でもない、子どもでもない、夫を愛すること、それが神のみことばだと教えるのです。では、具体的にどのように愛するのでしょうか？

(1) 夫に対して常に親切に優しくあり続けること

実際にこのことが自然にできるときと、難しいと感じる時がありますが、私たちの感じ方によって行動を決めてはならないのです。神が言われていることを行なって行くことです。神が夫を愛しなさいと言われている以上、どのような夫であっても親切に優しくして行くのです。神が望んでおられることであれば神が助けてくれるはずですが。

(2) 夫に仕え励まして行くこと

考えてみてください。神は何のために女性をお造りになったかです。男にはふさわしい助け手がいなかったのです。だから、ふさわしい助け手として女を造られたのです。それが神の創造の目的です。

(3) 夫を自分よりも優先すること

これが一番難しいことでしょう。私たちの問題は何ものよりも自分を優先することです。自分が常に中心でなければならぬ、いつも考えの中心に自分があるのです。私たちが自分に問いかけることは、私が相手を幸せにするための努力をしているかどうか、相手を愛し、喜んで犠牲を払おうとしているかどうかです。イエスはヨハネ 15 : 13 でこのように教えられました。「**人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。**」と。つまり、神が私たちに示してくださった愛というのはご自分を犠牲にされたものです。神が人となってこの世に生まれ、ご自分のいのちを私たちのために捨ててくださった、ご自分のことより私たちのことを考えてくださり、そして、最も大事ないのちさえも犠牲にしてくださった、その愛が私たちにとっての模範なのです。だから、神が私たち、特に婦人たちに、あなたの夫を神が愛してくださったように愛しなさいと教えるのです。⇒これが神が望んでおられることなのです。夫がますます神に喜ばれる者になってほしい、神の栄光を現わす者になってほしい、神に用いられる者になってほしい、そのために私は彼に仕え、彼を励まして行こうとするのです。

2) 子どもを愛しなさい

今度は母親に対して、子育てをしている母への教えです。「**子どもを愛し**」と。子どもを愛するということときえるべきことは、

(1) 無条件に愛しなさい

自分の理想にかなっていないから、自分の言うことを良く聞くから、愛するものではありません。それは神が私たちに示してくださった愛ではないし、私たちに期待されている愛でもありません。たとえ彼らが罪を犯したとしても愛するのです。主が私たちに対してなし続けてくださっているように彼らを愛し続けるのです。それは罪に対して目をつぶることではありません。神が私たちの罪に対して凝らしめを与えるように、私たちも罪に対しては間違っていることを明確に伝え、正すことです。だからといってその愛が変わるわけではありません。今、特に誘惑の中にある子どもたちを理解し、励ますことです。子どもを愛していることを親は子どもにしっかり教えて行くこと、子どもたちがその親の愛をしっかり受け止めていること、それが大切です。

(2) 最も大切なことを教えて行く

それはイエス・キリストにある救いです。私たちは親の責任を勘違いしてはいけません。悪魔は見事に私たちを騙します。親としての責任が神のことを教える以外にあるかのように誘惑します。なぜ神は私たち親に子どもを託してくださったのか、目的があるのです。それは、この世では世間的に良い学校に入れたり良い職業に就かせることで、そのために一生懸命労することであるというかもしれません。

でも聖書はそのようには教えていません。神が親に託された子どもに親は責任を負っています。それは子どもたちに創造主なる神を教えることです。何のためにあなたが造られ生かされているのか、人生の目的を教える行くのです。どのようにすればこの創造主なる神を愛し喜ばせて行くことができるのか、それを教えなければいけないのです。それが親の大きな責任です。なぜなら、私たちが神の前に立ったとき親として何が問われるでしょう？それは神が親である私たちに託された子どもに一番大切なことを教えてきたかどうかです。それを教会学校に任せるのではなく、協力して行なっていくのです。親は子どもと接している時間のすべてを通して、子どもたちが一番知らなければいけないこと、すなわち、神について教える行くのです。もしこの大切な責任を果たさないなら、私たちは後悔してもし切れません。私たちはみことばにしっかり立つことです。この世は親にいろいろな情報をもたらしますが、この世を支配しているのはサタンです。人生はすばらしいものだ子どもに教えることができるのは、救われて神とともにあるからこそだと覚えるのです。それだからこそ、神をほめたたえ神に喜ばれることを行なうことで神の栄光を現わして行く、そのすばらしさを教える行くことができるのです。

パウロは子どもたちを愛し、子どもたちが知らなければいけないこと、この地上の生活においても、死後のことについても大切なことを教えるように言うのです。だからパウロはⅠテモテ 2：15でこのように教えたのです。「**しかし、女が慎みをもって、信仰と愛と聖さとを保つなら、子を産むことによって救われます。**」と。この救いは罪からの救いではなく、守るとか解放する、いやすという意味を持ちます。「**子を産むことによって**」と、これは神が女性にだけ与えられた大きな務めです。そして、「**によって**」ということばは、それに伴う状況を指しているのです。救いの手段を教えているわけではありません。子どもを産むこと、それに伴う状況、それによって救われる、解放される、いやされるというのです。つまり、パウロは子育てについて言うのです。なぜなら、この前の14節を見ると「**また、アダムは惑わされなかったが、女は惑わされてしまい、あやまちを犯しました。**」とあります。確かに、エバが罪を犯しました。それによってアダムが罪を犯し、人類に罪が入ったのです。そのような問題から解放される、いやされるためには、罪をもって生まれてきた子どもたちに神のことを教える行くことだとパウロは教えるのです。子どもたちが主を愛し主を恐れる者となるように、教え訓練して行くことです。

子どもを愛する親は、機会があるごとに、子どもたちにみことばを教える行くことです。子どもたちのためにとりなし続け、証をし続け、模範を示し続けてゆくことです。信仰の先輩として…。パウロはことばだけでなく実践を伴った模範を示すようにと教えます。信仰者としての模範です。

(3) 慎み深く

5節に「**慎み深く、**」とあります。節度を保ちなさい、いつも神の前に何が正しいのかを考えて、欲望に惑わされることなく、正しい判断をしなさいということです。誘惑の中に生きている私たちは神の前に正しいことが何かを常に考えて行くことが大切です。

(4) 貞潔

「**貞潔で、**」とあります。パウロは母親に自分自身を聖く保ちなさいと教えるだけでなく、人に誘惑を与えることが決してあってはならないとも教えるのです。ですから、自分の身だしなみなどに注意しなければならないのです。

(5) 家事に励む

「**家事に励み、**」とあります。今の世の中は女性が家庭に留まることに對して、その才能を埋もらせることだとして反対しますが、みことばを見て、何のために神が男と女を造られたのかを知るべきです。神は女性に、家庭という大きな影響を与える責任の場所を与えられました。箴言 31章のみことばの、27節にはこのように書かれています。「**彼女は家族の様子をよく見張り、怠惰のパンを食べない。**」と。神を愛し神を恐れる女性ですが、同時に彼女は家族の様子をよく見張っていたのです。家族の必要に答えていたのです。家庭という場所にあつて彼女は自分の責任を十分に果たしました。

(6) 優しくありなさい

「**優しく、**」とパウロは教えます。例外なくすべての人に対して、思いやりとあわれみをもって、良いこと正しいことをして行きなさいということです。

(7) 夫に従順であること

「**自分の夫に従順であるように**」と教えます。その権威の下になること、下級の兵士が上官に従うようにという意味をもったことばが「従順」です。妻は夫に対して自らの意志で彼に従って行こうとするのです。夫が妻に罪を強要した場合を除いて、です。サタンはそれが損であるかのように惑わします。しかし、みことばを見たときそれは明らかです。夫に従順であることは神に喜ばれることです。それが神のみこころなのです。

パウロは、若い婦人たちがこのような者に変えられることを望みつつ、主に対して忠実に歩んで行くことを教えてくれました。これが神のみこころである以上、それを行なうことによってのみ、神の祝福

をいただくのです。

C. なぜこのように生きるのか 5 b 節

その目的が記されています。「それは、神のことばがそしられるようなことのないためです。」と。これは神のことばが悪口を言われるとか、ののしられるという意味です。パウロがここで言いたかったことは、婦人たちよ、どのような年齢にあらうとも、あなたの周りにはあなたを見ているのですよ、ということです。あなたの夫、子どもたちはあなたの行ないを見ているのです。語ってはいてもそれを実践していなければ、彼らは何と思うでしょう？それは神に対して、神は全能と言うけれど人を変えることはできないと、神のことばがそしられてしまうのです。だから、私たちの行ないが大切だということです。今日、見てきた行ないの一つ一つは、正直、私たちには難しい大変だと感じることばかりでした。だから、私たちが最後にしっかり覚えるべきことは、パウロが教えること、「わたしの恵みは、あなたに十分である。」

(Ⅱコリント 12 : 9 a) というみことばです。それは、私たちが神のみこころを行なっていくために必要な力というものは、神は十分に備えてくださっているという約束なのです。今日のみことばを見ても、もしそれらのことが無理だと思うならそれは、それを自分の力でしようと思うからです。私たちがしなければいけないことは、神よ、私はこのように生きて行きたい、このような婦人に変えられて行きたい、だからあなたの助けが必要です、といって神を見上げることです。その時に神が働いてくださるのです。これがクリスチャン生活のカギです。神が私たちに働くためには私たちは決心をすることが求められているのです。今日教えられたことを実践して行こう、このような人物に変えられて行きたいと。

地上に生かされている間、神を愛する女性としてこのように歩み続けて行くなら、主は喜んでくださり、主のみ栄えが現わされて行くのです。